OB会報

第八号

横浜国立大学

ワンダーフォーゲル部

OB会発行

1967.11.23

特集

第一回夏合宿

ワンゲル十周年をむかえ、OB会でできてから、七年目をむかえた。OB会は月例ワンダリングを開始したときから、合宿を是非行なうべきだとの考えに立っていたが、本年ようやくこの計画が実現した。

今回の合宿に参加したのは八名であり、テントサイトもポピュラーなキャンプ村であったので、現役のそれにくらぶべくもないが、ワンゲルの第一回合宿が北軽井沢で参加者十名程度、テントは用いずバンガローを用いたということを考えるとき、第一回を行なったという事実が非常に重要であって、これに続く第二回、第三回の合宿を着実に続けてゆくことが必要であると思われる。

夏合宿を終わるに当たって、参加者の一致したことばは「来年もまた合宿を行なおう」ということであった。

※第一回夏合宿

概要

一、期日　八月十八日～二十日

一、場所　木曾御岳・開田高原

一、参加者

Aコース　L嘉納(1)、宮崎(2)、岩上(2)、時田(5)、密島(6)

Bコース　L江崎(3)、諸節(3)、石田(3)

一、コース

Aコース　十八日(十七日夜行)

新宿　木曾福島　西野　開田キャンプ場(泊)

十九日　木曾御岳往復

二十日　開田キャンプ場

木曾福島　名古屋　横浜

Bコース

十九日(十八日夜行)

新宿　木曾福島　八海山

木曾御岳　開田キャンプ場(泊)

二十日　Aコースに同じ

もくじ

特集

第一回夏合宿　1

木曾御嶽と開田のこと　宮崎祐　2

Aコース紀行　宮崎祐　2

B隊始末記　江崎伴雄　4

夏合に参加して　諸節紀代子　5

大蒜を食うと走りたくなる合宿　密島英二　6

現役問題

事務局会　8

現役分裂事件についての経過　8

事件の問題点　9

春合宿事故を顧て　現役に対する要望　11

山小屋委報告　都司直樹　12

月例ワンダリング

成吉思汗山行　密島英二　13

北から南から　15

トピックス　井上肇　7

住所変更のお知らせ　16

木曽御嶽と開田のこと

宮崎　紘（二期）

私が初めて開田を訪ねたのは、大学を卒業した年の秋十一月初めの連休のことだった。世紀の悲恋といわれ、世界の話題を一身に集めた傷心のタウンゼント大佐が一人逍遙したのがこの開田高原だったそうだ。そんなことがその頃の私を何となく開田に向わせたのであろう。この時はひどい雨に降られ、又開田の旅館はどこも満員でことわられるなど惨々だった。しかし木曽福島の宿でシトシトと降る時雨のトレモロを、木曽川の潺々とした流れを聞きながら、炬燵に足をつっこみ、中仙道木曽路の宿場で初冬の旅情をしみじみと味わった。

それから二年後の秋にもう一度こゝを訪れた。この時は宿も予約しておいたし、天気にも恵まれ、地蔵峠から把の沢、西野峠を越えて西野への高原と峠歩きは、カサコソとなる落葉に、ひっそりと咲き残ったマツムシ草に全く快適な旅だった。宿では手打ちの高原ソバに舌鼓を打った。翌日は西野から南へ、初雪をかぶったキリマンジャロを右に眺めながら、明るい高原を黒沢まで歩いた。

翌年の五月、今度は高山線に乗って飛騨側から御嶽の懐へ入った。飛騨小坂から濁河温泉へ。渓流にミソサザイの美声を聞きながら、大きなツララのぶら下った谷底の露天風呂につかり、一人旅の淋しさをかみしめた。このときはさらに高山、飛騨古川、富山へと足をのばした。

そして今度初めて御嶽の頂上を踏んだのである。

最近の上高地、北アの賑わいに比べて、この御嶽周辺にはまだまだ静かな処が残されているようだ。今度訪れる時は濁川、三浦湖へと思っている。

Aコース紀行

宮崎　紘（二期）

久し振りに、新宿発の夜行列車に大きなザックとともに乗り込んだご機嫌な五人の男達。昔と変わったこととといえば、学生時代は慎しみ深く長ズボンにスネをかくしていた彼等が揃いも揃って、年甲斐もなく、毛ズネ丸出しのショートパンツスタイルになっていることである。早くからやってきてゆったり占領した座席も、グループのお嬢さん方が乗り込んでくると、「詰めてあげましょう」とコンパートメントを明けてやる、相変わらずのフェミニスト振りを示す。そして昔に劣らぬ豊富な話題と深い教養を交換し合う。小生の提起した問題児の問題も、I先生の「問題児の心理と補導について」の経験を通してのご高説に、小生も得るところ大であった。あとはK先生の黛ジュンの歌から天下国家論まで、ついに塩尻に着くまで終わりはなかった。こうして第一回OB会合宿のA班はスタートしたのである。

出発に先だっての食料の買い出しがまた大変だった。K先生、I先生と小生の三人が、夕餉の支度の小母族で賑わう弘明寺商店街のスーパーマーケット、肉屋、八百屋と回って歩いた。そして大学のK先生の研究室で、共同装備と食

料を三人で分担する。おかげでロートル三人が三〇キロ近い荷物を背負う羽目になった。

木曾福島からは小生にとっては三度目の開田行きのバスにゆられる。ブラリ族のハイカーにバスを降りる場所を決めてやったり、Y君の縁談を心配してやったり、また窓外の御嶽乗鞍、中央の山々を眺めたりの賑やかさである。しかしそのうちに腹が空いてきて朝食の弁当を買ってくるのを忘れた事に気がついた。結局、バスを降りた所で、弁当を待ってきた二人分を五人で分けて食べる。それから近くの農家で高原キャベツを分けてもらい、キューリ、トマトを買い込む。高原はススキが穂を出し、マツムシ草が咲き、風は早くも秋の風だった。十一時近くになってやっと重い荷物を担ぎあげてキャンプ場に向かう。K先生は冬山に備えてのトレーニングと称して、相変わらずのタフ振りを示す。キャンプ場は意外に遠く、腹がへってきても水だけしか飲ませてもらえなかった。途中畑の中の一本道に水道が見つかって、栓をひねるとガスとともに、シュッシュッと生温い水が出てきた。「水腹も一時」とこれを腹につめる。あとで考えてみると、どうも田んぼからの漏水を飲まされたようだ。一時過ぎにやっとキャンプ場にたどり着いた。T君とM君の大活躍によって、最高に美味いヤキソバができ上り、われわれ五人は復活したのである。キャンプ場の静かなことと、男ばかりなものだから、昼食はまさに裸族の会食だった。

木立の奥まった所に二張りのテントが設営され、Kリーダーの宣誓によって合宿のテント村の開村式を行なう。

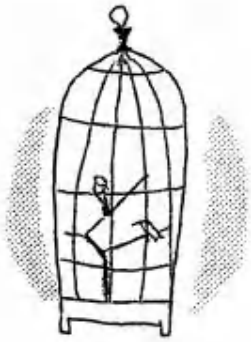
それからすぐに夕食の準備にとりかかる。現役時代には何もできなかったK先生、奥さんをもらい最近お嬢さんが生まれたと聞いているが、このK先生が飯盒のご飯を上手に炊いてくれたのは一体どういうことぞ！一同首をかしげる。献立は特製スタミナ料理である。ドラム缶の底で作った特製鍋による成吉思汗料理肉よりもニンニクの方が多いくらいのスタミナ焼きは、その芳香によって近くのキャンパーの鼻を大いに刺激したようだ。とにかくわれわれは翌日の御嶽登頂に備えて、ガリガリガーリックを食った。食った量が年に比例したのはなるほどとうなずけた。そしてこのとき、九月の月例Wは丹沢でのアンコールが決められた。今合宿参加者と九月月例の参加者をよくごらん下さい。

翌朝は、五人揃って寝坊してしまって出発が予定よりも一時間遅れてしまった。しかし一同元気に朝露を踏んで登る。北八ッ岳によく似た、苔むした岩と木の根の原始林の薄暗い道を登る。樹木帯を抜けるころより可愛らしい色とりどりの高山食物に迎えられ、途中昨夕のスタミナ料理の薬石の効なく、テントへ帰ると泣き事を言った男も急に元気づき（もつともガーリックはこのころ効いてきた）、三の池からのガレ場を駈け登る。結局頂上でのBコース江崎隊との約束の時間に遅れること三〇分、十二時半にめでたく剣ケ峯のランデブーは成功した。

キャンプサイト帰着後は、総勢八名の賑やかな夕食（ワンゲル定食カレースープ）をとり、食後は焚火を囲んで、三人の先生の指導による歌やゲームにみな童心にかえり、

夜の更けるのも忘れていた。焚火もつきる頃、唐松林の上に月が出て、第一回OB合宿をもり上げてくれた。

最終日は明け方から雨になった。そしてキャンプ場から西野までの雨の高原歩きも楽しいものだった。マツムシ草、女郎花、吾亦紅などが白い雨足にうたれ、唐松の枝先からは大きな水滴がしたたる。これが首すじなどへとび込んで思わず首をすくめたりしながらの高原歩きは、早や秋の訪れ近い御嶽、開田の合宿のフィナーレにふさわしいものに思われた。



B隊始末記

江崎伴雄（三期）

金曜日の夕刻の列車は夏山の最盛期も過ぎたためか、案外とすいていて楽に座れる。久し振りに顔を合わせた石田嬢、諸節嬢と賑やかに語り合い、種は教育ママの事、早くも世代の差を感じ始めた現在の大学生とわれわれとの意識、ふるまいの相違など、さてはわれわれサラリーマンの立場から先生の立場を美んだり。

ワイワイ言っているうちに弁当を買い忘れ、車内のビュッフェは麺類のみ、甲府駅はもう売っておらず、やっとありつけたのが乗り換え駅の塩尻。ここで買った釜飯と甲府のパンでどうやら翌日の昼飯まで確保したわけで、まずひと安心。塩尻二三時四〇分の大阪行急行で木曾福島には〇時三八分に着いてしまった。バスの切符を売り始めるのが二時頃だという話なので、駅のベンチへ〝昔取つたきね柄〟（？）でゴロリと横になる。深夜の山麓、さすがに涼しい。目が醒めると駅前でもう並んで切符を買っている。時計を見ると二時半。しまった、遅れをとったかとすぐ並んで購入するとわれわれの整理券は二六番目からでホットする。周囲の大勢の若者はほとんど上高地へ行くらしく乗鞍方面は割に少ない。バスは三時ちょっと前に出、リクライニングシートなのでこれは快適とばかりすぐにウトウト。七合目の田原山荘前にほうり出されたのが五時前で、ゾクゾクするほど寒い。小屋（と言っても大きな旅館のよう）に灯がついているので足を向けてみるが、まだ営業していないというのでガタガタ震えていてもしょうがネェと朝食はおあずけにして歩き出す。ここは他にも建築中のでっかいホテルのようなものもあり、来シーズンあたりからガッポガッポと儲けるのだろう。道はかなり広く、平坦で所々に散策道などもあって、のんびりぶらつくのにもよさそう。ただ残念な事にもう日も出る頃だろうと思われるのにガスで視界は悪く、どこに何があるのか初めてのわれわれには何もわからないのでただ黙々と歩を進める。暫くすると七合目半の小さな社の前に出、ここで塩尻の釜飯が腹の中に収まる。このあたりからやっと山道らしく細い登り道になり、時々ガスの切れ間から上の方がチラリチラリと思わせぶりに見える。われわれの前後に〇〇講だの〇〇会だのといったおじさん、おばさん連中が登る。

口ばかり達者で足の方がもたついている年輩の男、威勢よく白装束に金剛杖で〝六根清浄〟をとなえながら登るオヤジ、地元の人に手をとられながらゆっくりと下ってくる老婆などで、われわれ山男、山女の方が小さくなって登る。またわれわれとしても睡眠不足で調子はそんなによくなく、二十分に一回位休みながらのんびりと登る。出発してから一時間四五分位でほんのちょっぴりだが清冽な湧水の出ているところに来、のどを潤す。この付近にはチングルマ、イワカガミ、コバイケイソウ、イワギキョウなどあり、それぞれに挨拶をしてくる。

この後、王滝山頂手前のお花畑でもイワツメクサ、ヨツバシオガマ、オンタデ、コガネギクなどあり、本を片手にあれは何、これは何とやって、これらの名を覚えたわけである。

ここから小屋の裏に廻ると剣ケ峰頂上がすぐ眼前に立ちふさがっている。ああこれならもうすぐだとまた記念撮影などして時間をつぶす。

最後の百二段ある階段をフーフー言いながら登りつめ、鳥居をくぐったのがちょうど九時であった。せっかく頂上へきたのに視界は展けず、時々ガスが切れてすぐ下の二の池が見える程度で、残念至極。あまり広くない頂上もかなり人間様がうようよしているので傍の小屋で休ませてもらうことにする。お茶をもらって菓子をつまみ、ゆっくりと昼寝をし、先生方は教え児達に手紙を書き、かくして待てどくらせどA隊のメンバーは全く現われる気配が無い。十二時近くになって小屋の前を行ったり来たりして、ガスの切れ間にわが愛する頼もしき面々の姿を捜すがダメ。諦めて先に昼食をとって下れば途中で会うかもしれないと、細々と食事を始めると、小屋の戸を開けて「ヤア、いた、いた」と岩上先生の張りのある声が聞えホッとする。時に十二時四〇分頃。

フルメンバーの八人が揃って頂上で記念撮影し、われわれ三人は荷物が重いので足手まといになっても悪いと思って一足先に下り始める。

ところがこちらの殊勝な気持を知ってか知らずか、いつまでたっても後発隊はやってこない。二の池を過ぎ、花などをながめながら三の池も過ぎ、アザミの刺を避け、さては小さな涸れ沢のそばの大きな石のゴロゴロした道をドスンドスンと下って行くうちにいいかげんイヤになってくる。

とうとう皆かなりバテ気味になって五合目のちょっと上の所で大休止をし、菓子をバリバリ食い、水をガブガブ飲み、某女史は靴まで脱いでハダシになって座り込んでしまう。漸く嘉納さんの姿が現われ、続いて残りの四人もきたのでやっとこちらの口もつられて回転し出し、深山が時ならぬ喧噪につつまれる（？）。（こちらの道は不便な事もあって通る人も少なく、まして ジイサン、バアサンなど登るはずがない）

ここから一時間程でやっと待ちこがれたテント村にたどりついた次第である。

……

夏合宿に参加して

諸節紀代子（三期）

……

かれんな姿のこいわかがみ、あおのつがさくら、紫のあざやかな岩ぎきょう、白いこばいけいそう、かわいいチング

ルマなど、立山合宿以来名前も忘れかけていたこれらの高山植物がいちめんに咲きみだれるお花畑を眼前にすると、「ああ、山にきてよかった」という思いがした。

学生時代から、体力には自信がなくて、いつもへばってしまうのだが、自然の美しさに見入っていると苦しいことなど忘れてしまう。今回のワンゲルOBの初の試みである合宿もふだん山歩きをしないので、行けるかどうか心配だったが、幸い同行者が、江崎さん、石田さんと同期のメンバーだったし、先発の方々がテント、食糧などを運んで下さったので、荷物もなく、気軽に楽しく行くことができた。

お花を心ゆくまでながめ、名前を調べたりして、十五分行っては十分休み、歩く時間より休む方が多いくらいの、のんびりしたペースでのぼっていった。

私達は王滝コースで、バスが七合目まで上り、頂上まではあと八六〇米の高さをのぼればよい。それだけに一番にぎわうコースである。白装束の信者、老人、子ども、中年のおばさんなど、信仰の山として、富士山、立山、白山などと並んで、夏は登山者の行列が続いていた。

朝五時バス終点田ノ原を出発して、頂上に着いたのが九時だった。剣ケ峰頂上には御嶽神社が祭られ、信者が参拝していた。霧のため見晴しはよくなかったが、頂上にある鐘の音がカーンカーンと気持よく響き、疲れをいやしてくれた。

開田組の人達と十二時に会う約束だったので、それまで頂上下の小屋で待つことにした。夜ほとんど眠っていないので、小屋でヤッケやセーターなどを着て昼寝をした。十二度という気温は寒さを感じさせた。開田組の人達と、十二時を少しまわった頃合流した。

下りは岩と木の根だらけの開田組が登ってきた凸凹道を何度もつまずきそうになりながら、がたがたと足を運んで、どうやらこうやら先発隊が用意してくれた開田高原キャンプ場のテントサイトにたどりついた。

夜、いきおいよく燃えるファイヤーを囲んで、まわりから聞こえてくる歌声に負けじと大声をはりあげて、火がつきるまで歌った。ふと、現役時代の合宿のファイアーを想い、なつかしさで胸がいっぱいになった。この次の合宿は、ファイアーのまわりの円がもっと大きく広がって、歌声がもっとひびいてほしいと思わずにはいられなかった。

蒜を食うと走りたくなる合宿

密島英二（六期）

バスを降り、久方ぶりのニコションの感触にワンゲル精神が全身にみなぎってきたような快感を覚えて御嶽目指して歩を切ったが、三十分で着くはずの天場がいっこうに現われない。CL嘉納氏はトットコ先に行ってしまう。八月も末と言えど御天道様はやけに照りつけ、早くもこちとら青息吐息。

一時間半余りしてかろうじて天場にたどり着く。昼飯に焼ソバを作り、続いて夕飯の仕度にかかる。陽もかたむく頃、宮崎氏持参のスペシャル成吉思汗鍋を囲む。ジュージューと肉の焼ける音が深山にこだまはしなかったが、その臭たるや猿も木から落ちるほど食欲をそそる。それもその

はず、大蒜（ニンニク）を充分に入れてあるのだから、皆それぞれにハーハー、フーフー言いながら、舌づつみを打つので、せっかく寝かけたタヌキの小坊主が起きて、月を見ながら踊りだしたのではなかろうか。昼間のバテぶりはどこへやら、諸氏喜々として鍋をつつく。そのうち嘉納氏、丸のままのニンニクを焼いて口にほうりこんだ。岩上、宮崎両氏もそれに続く。時田氏ややためらいがち。二つ三つとなると顔を油ぎらせて水をガブガブやってハァーハァーと息をはく。全身カッカッとして話もエキサイトしてはずむ。その時突然某氏立ち上り、ヒーヒー言いながら一座の回りを走り出した。いやぁ、ニンニクの効果はすげえ、すげえ。

ついつられて、こちらも口にほうり込む。暑いので舌の上を六回ころがして奥歯でガリッとかむと、のど笛あたりまでヒリヒリする。目をつむって六回ガリガリとかんでゴクッと飲み込んだ。三回だけハァハァハァと息をはいたら、思わず腰が浮いた。あやうく走り出すところをどうにかこらえてポリタンを口に中に押し込んで水を流し込んだ。中味が石油でもベンジンでも気が付きゃしない。これじゃ現役に「ポリタンを使う前に中味を確認すれば事故は起こらないはずだ」なんて言えた義理じゃない。やや落ち着くとまた猛烈に肉がうまくなる。

惜むらくは、ここでニクニクのストックが切れてしまった。もしもまだニンニクがあったなら全員で天場を走り回ったことだろう。ニンニクの効果は翌日にもあらわれた。OB会の古参を含めたパーティーが六時間の登りを五時間につめて全員頂上に達したという事実がこのことを如実に語っているではないか。

尚、ニンニク礼賛説は身をもってその効力を知った氏が発表されることと思われるので、小生ごとき若輩がここに披露するまでもなかったかも知れぬ。

トピックス

◎　水戸線に川島という駅があります。駅のすぐそばが鬼怒川で、川べりに東京でもちょっとやそっとでは食べられないような味のよい料理を出してくれるクラブがあります。きいてみたら、かつて那須御用邸の料理番だった人が庖丁をにぎっているとの事です。やはり違うんですかね。

◎　ワンダリングの往き帰りに、時々釜めしを買う事があります。峠の釜めしの釜はどこからやってくるのかと思ったら、栃木の益子からでした。益子焼の特徴は、あの釜にある褐色だそうです。そこで私も益子でその褐色のトックリとサカズキを買って、行きつけのすし屋にあずけました。そこで一杯ネ！

◎　北関東の春合宿をしのんで栃木の片田舎を歩いていたら、校庭のちょうど真中に大きな紅葉の木がでんとかまえている小学校がありました。雨の日は傘になってその下で遊べそうです。

（三期　井上）

現役問題

事務局

現役分裂事件についての経過

本年六月十七日　経済学部のワンダーフォーゲル部室に改新同盟という名のもとに一枚の声明文がはり出されたことから騒ぎが表面化した。声明文は渡部主将、和田副将らが、現在の部の状態に満足できないから、夏合宿はともかく行なうが、その後九月に辞任するというものであった。

しかしながら、このようなことが起こることはすでに半年も前から予感されていたことであった。すなわち今年の三年執行部の人事を決めるときに、すでに明らかに意見の異なるいくつかのグループが存在したのである。

渡部主将らの意見はほゞ次のようなものである。「ワンダーフォーゲルとは何か？それは人間的なものの尊重、心の自由の追求の精神をもつての集団的移動生活であると私は思う。従つて野であれ山であれ、海外であれ、どんな場所でも一回勝負の真剣な姿勢を持ち続けて歩くことである。しかし又ワンゲルがサークルである以上、サークルは統一体であるから、前述の態度を基本とした上で、何らかの統一が必要であつて、種々雑多の現状をそのまま認めることはできない。サークルとは個人の欲望の満足をいかに集団の中で実現させてゆくかにあり、ここに団体として仲間意識の高揚があり、これをこそ私達が求めているものである。この点からみて過去の低迷化の集積としての今年度の活動現状を考えてみても、一体サークルの現状をこのままにしておいていいものかと思われる」

これに対して多くの他の三年部員は、このような意見が部の活動方針となると精神的な束縛をうけることになると考え、あるものは積極的に反対したが、他のものは無気力な無関心さを示して消極的に反対した。このように多くの三年部員は団体活動における精神の止揚を高く評価せず、従来からの形体での活動を行ない、個人的にそれぞれの欲望を満たせばよいという態度であつた。

このために渡部らが主将となり、その信ずるところを実行しようとした夏合宿の計画において、この対立が烈しくなり、ついに声明文が出されるに至つたのである。

翌六月十八日は総会があり、この問題をめぐつて紛糾し、総会はついに三年生のリーダー全員を罷免し、その後の処置を再建準備委員会に任せた。

このようなことに発展したのは、現役のすべての機能が三年生のみによるリーダー会に集められ、総会はその決定報告を聞く会になつており、三年独裁の閉鎖的機構であつて、前述の意見の対立も専ら三年生内部の事件であり、総会において突然そのような末期的分裂状態を知らされた他学年の部員が、三年全体を不信任したものといえよう。

六月二十日に第一回再建準備委員会が開かれ、これにはOB側も参加した。六月二七日OB会事務局は、事態掌収にのり出すことを決定し、新

しい組織を提案することとした。七月二日に再び総会が開かれ、ＯＢ側提案に沿った新しい組織を採択した。渡部、和田ら５名は部を去った。

新組織にあっては、従来の組織の欠陥として

(1)三年生独裁

(2)三年の構成するＬ会は三年のほゞ全員が入っており、全員の合議でのみ事が決し、役員は名のみで、責任の所在もはっきりせず、意志決定は遅延をきわめ、機動性をまったく欠いた。

(3)リーダー会本来の研究がそのために何らなされなかった。

の３点をあげ、改革点として

(1)学年独裁の排除、総会の権威復活

(2)執行機関における人数の削減、機動性の向上

(3)ワンダリング技術の向上のためリーダー会は本来の目的のみを行なう。

このため新しく「委員会」をつくりこれを執行機関とし、主将、副将、チーフマネージャー、学年代表によって構成され、大筋は総会で定め、細部決定、執行はすべてこの委員会で行なうことになった。

なお、新しい現役主将は経済三年三浦煌太郎である。

（一期　嘉納）

事件の問題点

昭和三二年ＹＷＶが創立されて、今年は満十年になる。この間に七期生、百余名のワンゲルＯＢが誕生した。そして現在も、ＹＷＶは百名近い部員で構成された学内でも有数なサークルである。

さて創設十年にして起こった今回の部の混乱に対して、我々ＯＢもいろんなことを考えさせられた。

ＹＷＶの創設当時、サークル理念は、既成観念にとらわれない、広く、自由に、発展的にという考えに基づいていたように思う。そのために部のシステム、行動の固定化は行なわれていなかった。そしていつの頃か、毎年年度初めに、その年の重点的活動目標を決めて初志の広く、自由なワンゲル活動を行なってきた。

三六年　創設者であるワンゲル一期生が卒業し、ＯＢ会なるものが生まれた。ＯＢ会は初期の親睦団体から、現在のＯＢ独自のワンゲル活動の団体へと発展してきた。このＯＢ会は、現役のワンゲル部に対し、創設当初の部の自由なワンゲル活動　精神を尊重して、部活動には全く会入しなかった。

然るに、この一～二年、ＯＢ会は山小屋問題などで現役部と話し合う機会が多かった。これらの機会を通して、ＯＢの中には現役部の状態を批判的に眺める人が出てきていた。しかしＯＢ会としては、現役に対し全くの不干渉主義をとっていた。

ところで今年になって現役部に続いて起こった出来事、すなわち、①春合宿事故、②七期生の会計に関する不祥事、③機関誌スカイラインの発行途絶、そして④今回の問題と続いた。これらの諸問題についてＯＢ会事務局は、繰り返し検討を行ない、今年度のはじめに、ＯＢ会として初めて顧問を通し、現役に次の二点について申し入れを行なった。

①部活動の報告として部誌を発行すること。

②会計を明らかにすること。

この申し入れの直後に、今回の問題は起こったわけである。この事件について、ＯＢ

会事務局は部内の山派、里派といったものゝ単なる対立ではないと見ている。この事件に至るまでの会計、部誌、合宿事故等、全て共通の原因があるのではなかろうか。それは、部員のサークル意識の低下又は欠如と言えると思う。部が大衆同好会になっているように思われる。

すなわち会員は、定められた会費を払って在席し、引き換えに会からは種々の便宜を受ける、ただそれだけの部員が多くなっているように思われてならない。山行、キャンピング等の技術を覚え、部の装備を自由に使い、ワンゲル部員というチョット格好いゝ肩書をもち、あとは自分の好きなように野行き山行きといった感じである。このように決めつけるのは現役諸氏には酷であるが、これらを強く否定してサークル活動を推し進めていこうとする気持は弱いように思う。

しかし一部には、特に役員の中には、このこわれかけた部を建直そうとする人達が何人かいた。これらの人達の考えは、彼らのグループとL会（三年生の集まり）では議論されたようだ。しかし部員全体に問題意識を持たせるような方法は何もとらなかった。そして部の執行機関であるL会では、意見の対立は感情的な対立に発展していた。こうして部刷新の運動は、部の役員の中で起こりながら、三年生のL会だけに内攻し、部員全員に考えさせる前に、多数の保守派に敗れたのである。このようなところが今事件の真相ではないかと思う。

しかし、残った部員も、この辞めていった人達の意志をひきついで、遅まきながら部の刷新に意欲的にとり組んでいる。先ずこのような問題が三年生のみに内攻し、感情的対立にまでなったのは、部の組織に欠陥があったとして、部の組織から改革を始めた。そしてとにかく暫定的な組織のもとに夏合宿だけは行なったようだ。

この事件についてOB会事務局は、いろいろ話し合った。その結果、ワンゲルのサークル理念があいまいであっただけに、創立当時の意図していたワンゲルと全く異質なサークルになってしまう恐れがあるということが指摘された。すなわち同じYWVの卒業生でありながら、極論すれば、共通の広場を全く持たないということにもなりかねない。これでは困るということになり、OB会は、現役部に対して従来のモンロー主義をすてて、現役との話し合いの場を持つべきだということが決められた。具体的には、

①現役の今後の組織検討委員会にOB委員を出す。

②年度初めと終りに、活動予定と実績の報告を受け助言を与える。

これはOB会が現役を監督するというのではなく、OB、現役が交流を計り、YWVのOB・現役が相携えて、ワンゲル運動を発展させたいと願うからである。

現役部の一日も早く、今の混乱から自主建て直しを願っている。（二期　宮崎）

編集局より

事務局の若返りに伴い、従来米屋氏の手をわずらわしておりましたOB会報の編集が、次号より小生に委ねられることになりました。ふつつかながら、前任者同様ろしく御協力の程お願い致します。

今後は現役側へもOB会から投稿したいと考えておりますので、どんどん原稿をおよせ下さい。（六期　密局）

春合宿事故を顧て

現役に対する要望

昭和四十二年三月、現役の四国春合宿においてテント焼失事故が発生して以来、我々OBは事務局会にて事故の真因を究明すべく機会あるごとに検討を重ねてきた。社会的には小さな事件であったが「春合宿事故報告書」にも明示されているごとく、現役の真摯な問題追求の態度に接し、また事故を契機としてワンゲル活動の諸々の問題の再検討がなされている現状をみるとき、我々にとってこの事故は反省と前進をもたらす良き素材であったといえよう。

思うに「遭難」（今回の事故が定義的に遭難に該当するかどうかは別として）という最悪事態の発生は「過剰遊戯」という反社会性に対する批判を巷間に巻き起こすことは必定であって、かゝる場合の行動の正当性を立証する手立ては現状では皆無といってよい。したがって社会的行為の基本は、全体の中の規律の遵守にあり、単なる過失に起因した事故でもそれは社会において本質的には悪であることを自覚して、日々の行動の規範を形成し、社会との調和を計る努力を怠ってはならない。そしてワンゲル活動もまた社会的行為である以上、反社会性を生むような制度および心の弛緩は厳に戒めるべきである。ワンゲル生活の中に悪習に盲従し怠惰に安住する病弊がないかどうか、機関紙の未発行、会費未納のごときさ細な形式的問題にしてもその深底に潜む悪因がないかどうか慎重に見究めていこうではないか。

「春合宿事故報告書」が緊急に解決を要すること、容易に実行しうることに限って諸対策として打ち出していることは不満ながらも実際的ではあるが、もとより抜本的対策の樹が疎かにされることのないよう切望するとともに、我々の検討の結果をも併せて、今後の指針として、また諸対策の補足として現役諸氏の参考に供し、かつその実行の検討をこゝに要望する次第である。（三期　井田）

記

一　団体行動における規律を計れ
　(1)　諸規則を遵守しているか
　(2)　ワンダリング中においても社会の一員としての自覚をもっているか
　(3)　連帯意識に欠けていないか

二　ワンゲル活動における技術的側面を充実させよ
　(1)　上級生の指導力が欠けていないか
　(2)　組織的教育がなされているか
　(3)　マニュアルを作成して技術指導を徹底せよ

三　装備の拡充を計れ
　(1)　活動方針に基づく装備の長期購入計画を樹立せよ
　(2)　装備の質的調査研究をせよ
　(3)　共同装備および個人装備の標準化を計れ

四　執行部は今回打ち出された諸対策のfollow-upをせよ

五　遭難対策を再検討せよ

妙高高原笹ケ峰に決定!!

山小屋建設委員 郡司直樹（四期）

ＯＢ会報（第五号）で山小屋建設準備委員会の山小屋建設調査報告の答申と、山小屋建設準備委員会が発展的に解消して山小屋建設委員会が発足した経緯まで報告しましたが、その後の委員会の活動報告を行ないます。

まず準備委員会調査結果の第一級候補地について、現役側委員が四一年八月に銀山平（奥只見）、十月に笹が峰（妙高）を総合的に詳細な現地調査を行ない、次の各項目について委員会で検討した結果は左記の如くであります。

調査項目

1. 交通機関、徒歩距離、所要時間、積雪期の状況と安全
2. 現地の生活環境、自然環境、人的環境。
3. 周辺のワンダリングコース、幕営地、スキー場、ツアーコース、冬山。
4. 現地の建設請負会社、建設単価、工期。
5. 土地売買・貸借の問題、価格。
6. 今後の観光開発計画

調査結果

☆ 銀山平

春から秋までは枝折峠経由のバスを利用すれば問題ないが、冬は豪雪のため電源開発が最近一般開放した自動車専用トンネルが唯一のルートであり、トンネルを出てから銀山平まで4mを越える積雪で、歩行に危険を伴う。豪雪地域であるから小屋の除雪など生活環境はきびしい。自然環境はすぐれており静寂で周辺のワンダリングコースに恵まれている。土地購入の価格も格別に安い。ただし建設には耐豪雪用に材料費が普通の二倍かゝる。近い将来観光開発の行なわれる可能性が大きい。

☆ 笹が峰

春～秋は定期バス就行。冬はバスが妙高国際ロッジまでで、先はリフト利用。最初の予定地池の峰付近は水場がないのと西風が強くて冬は雪が吹きだまりになる心配がある。積雪は4mになることもある。周辺のワンダリングコースも相当考えられる。スキー場、ツアーコースも多い。土地は早稲田大の例があり、格安に貸借できる。建設会社は杉野沢部落に数社ある。材料費は相当高くつく。今後国民休暇村と国際ロッジ近くは観光開発進む見込みであるが、小屋予定地の付近はその影響も少ないと思われる。

以上の点から銀山平は冬期の交通機関に問題があり、笹が峰は水場の確保に困難があることが明らかになった。笹が峰の水場は周辺を広く調査すれば解決できるものと考えて、山小屋建設委員会は四一年一一月一三日の現役・ＯＢ合同の総々会で笹が峰が山小屋建設予定地に最適の処として答申し、左記の事項が採択された。

1. 山小屋建設予定地

妙高高原笹が峰

2. 建設スケジュール

四一年一二月～四二年一月　冬期の現地状況調査

四二年夏　水場確保の現地偵察、土地貸借契約、山小屋予定地の整地

四三年春　建設会社と請負

契約

四三年夏　山小屋建設

四三年秋　山小屋落成

3. 費用および資金

調査費　一〇万円

建造費　一〇〇万円

総　額　一一〇万円

内　現役負担分　五〇万円

　　ＯＢ負担分　六〇万円

4. 土　地

新潟県中頸城郡妙高高原町旧杉野沢財産組合所有地を貸借する。

5 借　地　代

近くの早稲田大の例二百坪を年千円で借用、周囲八百坪専用私有許可

6. 山小屋の設計

六期の久野君のアイデアをもとに後日詳細は検討する。

7. 山小屋使用細則

後日提出する。

その後四二年一月に現役・ＯＢ側委員合同で雀が峰の冬期偵察を行ない、雪積量が予想以上に多く調査活動に多大の苦労が伴ったが、結論として次のことが判明した。最初予定していた池の峰バス停付近は西風で雪の吹きだまりになり不適当であり、水場のことを考慮すると、(A)池の峰頂上の湿原、(B)池の峰東側三本木方面、(C)仙人池湖畔のいずれかが適当である。その後妙高高原町役場杉野沢支所長竹田幸雄氏との通信連絡により前記三候補地のうちで(A)は不適、(B)、(C)は水場が考えられ、土地の借用も問題が少なそうなので、今後は現地調査により水場を捜し当てることが急務となった。

四二年度は現役部組織で内紛問題があり活動が一時渋滞したが、八月にＯＢ調査団、現役調査団の二回の現地調査をし、池の峰より少し杉野沢部落寄りの三本木と五八木の中間で、早稲田大の小屋と武庫川女子大の小屋の間に、岡田氏個人所有の土地があり、そこにある古い造林小屋脇に古井戸を発見し、井戸は拡張すれば山小屋の水として十分賄える見通しがついたので、目下岡田氏所有地を二百坪借用したい旨を竹田幸雄氏に交渉中である。今後は借用ＯＫの内諾を得たら直ちに土地借用の契約を結び、今年末よりいよいよ山小屋建設資金の寄付を徴収し、明年建設という予定通りのスケジュールで進めていく手筈となっていますので、会員諸兄の絶大なる支援を期待する次第です。

月例ワンダリング

※九月十日　丹沢葛葉本沢

Ｌ密島、吉野、宮崎、岩上、萩野、井上、郡司、時田、原、古荘

肉につられて頂上まで。

※十月二十九日　武甲山

Ｌ米屋、宮崎

二人だけの静かな山を混ぜかえしてきました。

成吉思汗山行

密島英二（六期）

合宿の帰り新幹線の中でニンニクの話が出た。ジンギスカンが好評を博したので月例Ｗにとり入れることになり九月例会の企画ができた。

当日夢よもう一度と合宿でジンギスカンを食った五人中四人までが顔を出し、他に六人もの参加者があり盛会であった。

やけに暑い日であった。アプローチからすでにフーフー言い、うしろの方から食うものを早く食わせろなどと不平も聞えてきた。葛葉川本沢に入ると、多少涼しかったが汗は盛んに出た。例によって月例では間食がほとんどなく、

十二時近くになるとすき腹をかゝえて小滝を登り岩をこえて、水を飲んではまた登った。他のパーティが飯を食っていると生つばを飲みこんでなるべく見ないようにして通りぬけ、また登った。ようやく水も溜る地点にたどりついたが適当な場所がなく、リーダーが探していると皆ブッつとしてだまりこくってつっ立っていた。一時頃ようやく仕度が始まり、例の宮崎式スペシャル成吉思汗鍋を囲むと元気をとりもどし、二キロのマトンに野菜を思い思いにつついてたいらげてしまった。マトンがスジばっていたのはまずかったが、味はよく、ニンニクはみじん切りにして混ぜた他に、スライスして焼いたので刺激が少なかった。清涼飲料も出たし、飯もたいた。食後には果物とコーヒーも出た。おゝむね満足して二時半ごろ最後のガレ場にいどんだ。

丹沢の沢の常で最後は必ずいやなガレとヤブの中の直登を強いられる。今回も例外ではなく約三十分ほどだったが皆ヒーコラやって尾根道にたどりついた。とたんに「もう月例なんかに来るもんか」と不平が出た。しかし予定ではこゝから三の塔まで往復して下るのだと言うと全員頂上に向った。だれ一人「おれはこゝで待っている」などと言うものがいなかった。OB会も立派なもんだと感心した次第である。

下りは三の塔から大倉まで一時間で下ってしまった。この調子ではOB会もまだまだ現役と対にやっていけそうである。多少アルバイトを強いられたコースだったが、これにこりず今以上に積極的に月例に参加して、OB会員の親交を深め、OB会の覇気を示してもらいたいと願って止まない。

どうも御苦労様でした。

北から　地方近況　南から

※御無沙汰致しております。四月二六日無事長女誕生し、ふゆきとどきな母親ながらなんとか育てております。しかし勤めておりますから子供の世話は母まかせで育てるなんて偉そうな事はいえません。こぶつきゆえ夏期休暇にはいりましてもどこへも出られず、あわれな身の上、お察し下さいませ。（三期　塩谷―旧姓甘粕）

※夏合宿は参加できず残念でしたが、小生もこちらの山々を歩き回っています。大雪山のコマクサや礼文のエーデルワイスの素晴しさを皆様にも楽しんでいただけたらと、心から思います。

OB会の方にもすっかりごぶさたしておりますが、学生時代よりも色が見違えるばかりに黒くなっておりますので御安心下さい。（六期　秋山）

※遠い所へきてしまい、皆様におめにかかれるチャンスがなくなったのがひどく残念でございます。初めての夏合宿が無事楽しく終わりますよう、かげながらお祈り申し上げます。（四期　大黒―旧姓橋出）

※皆さんお元気ですか。当地に来て近い山と海には行っておりますが、遠いところではヨセミテに二度春と夏に行きました。上高地と大きな溜沢とツルギを合わせたようなデッカイところで、秋にも行きたいと思っております。十一月には帰りますが、また会えるのを楽しみにしてます。仕事もやっておりますので御安心下さい。カリフォーニアにて（二期　藤村）

※食べすぎのためか、飲み

すぎのためか、イカイヨウと十二指腸カイヨウだそうで、目下禁酒禁煙ですが、他の所は元気なので夏も生きとおせました。ワンゲルもゴタゴタしているようですがせいぜい活を入れて、なくなってしまわないようお願いします。

（五期　諸角）

※夏合宿の計画、楽しそうで、ぜひ参加したいと思いますが、すでに別のプランを立ててしまった後ですので残念ながら参加できません。六日より（注、八月のこと）鹿島灘へ出かけるつもりです。しばらく皆さんとお会いしていないのでとても会いたいです。

（二期　岩村）

※合宿の頃、会員の諸兄姉それぞれに自然界で活動しておられたようです。

白峰三山　8／8～8／13頃

二期　萩野

北海道　8／20まで

四期　谷上

北海道　八月中頃

六期　古荘

飯豊・朝日　八月初め

七期　坪

旭岳　8／5～8／6

六期　秋山

御嶽　7／28～7／31

五期　高橋

裏銀・雲の平縦走　八月初

五期　谷合、高須

長期旅行（場所不明）

七期　岡村

まだまだ色あせたＹＷＶのマークは全国各地を歩き回っていることでしょう。紀行文なり、お便りなりを編集局までお寄せ下さい。古き山の仲間達に「われ健在なり」を示そうではありませんか。

トピックス　アレ！コレ！

◎　月例ワンダリングをはじめて早二年。その間には参加者は少ないようです。という事は、ワンゲルを卒業すると全々出かけなくなるのではないかと思っていたら、そうでもないようです。みんなけっこうちょこちょこと出かけているようです。それならそれなりに素敵な山行な山行もある事でしょうから、ＯＢ会報に報告したらよいと思うけれども、そんな気配は全々ない。自分達の会報なのに、みんなペンをとるのがにが手とみえます。大体ワンゲルＯＢはそんなに気どらないと思っていたのに、ある人が、今の現役はワンゲルというものを自分のかっこいい肩書きにしかつかっていないと、言っていたが、それと同様にＯＢもそんなポーズをしているのでしょうか。

◎　一〇年たってワンゲルのワンダリング数も相当な数になっています。しかしこのたくさんのワンダリングのほとんどがみんなの目の前にあらわれることなく、ある特定の人の心にかすかに残っているだけです。そしてあるものはその人からも忘れさられているのです。今や一〇周年をむかえ、記念刊行物が出ようとしています。よき自分のワンダリングをふりかえって、ここにいくらかでも示しておいたらどうでしょうか。

◎　山北の近くに大野山があ

ります。こゝは五月にワラビでいっぱいになります。この間は成吉思汗月例をやったから、来年五月はワラビ狩り月例なんてどうでしょう。

◎　水戸の先、東海村の近くに分工場ができたため今年は行ったり来たり。おかげでむこうで休みをむかえるとあちこちと、こちらからはなかなか行けそうもない所に行けました。ある時は駅と駅との間が十六キロもあるという所に出かけ、その中ほどにある信号所で降してもらい、草野心平が名付けたという夏井川渓谷背戸峨廊に出かけました。丹沢なんかの沢より深遠として実に静かでした。

◎　ワンゲルに入った時の歓迎ワンダリングを第一回としてかぞえはじめ、ワンゲルに関係ないものも含めこの五月に一〇〇回をむかえました。その記念に、ワンゲル夏合宿の最初の集結地である安達太郎山に出かけました。あいもかわらず山はあり、すてきなお鉢もそのまゝに…あのざわめきもなく、ゆっくりと堪能してきました。あゝ年をとった事！

◎　県下の他の大学のワンダラーと話す機会を得ました。その時に国大の人は、確かになるほどなと思う事を言うけれども、実際にはそれが実行できてないから評判わるいよ、という話が出ました。確かに以前に比べ、思考面では成長してきたと言えると思うが、行動面は足踏み、もしくは後退という感じがないでもない。どこかレッテルだけで中味がともわなくてもよいという、あまえ、あまやかしがあるような感じがします。

×　×　×

名簿の訂正

四〇八九　牧原洋
（住所）国分寺市東恋ケ窪三の三三〇
日立第二協心寮
（勤務先）日立中央研究所
第七部六三一ユニット
（電話）国分寺（二一一）
一一一一内六八一

五一〇二　谷合成人
（住所）世田谷区世田谷三の六の一三

五一〇六　簑浦英一
（住所）中野区彌生町一の三八の六

編集後記

晩秋も暮れ近く、OB会も恒例の総会を迎える季節となりました。

OB会報も夏に引き続いて第八号を発行することができました。私もそろそろ老人の域に入らんとし、本号をもって新々気鋭の密島君（六期）に交代することになりました。

老兵は消えゆくのみ、マンネリ化したOB会報の内容にも、若い息吹が入り込んでくる事と思います。

乞う御期待!!　（米屋）

OB会報　第八号
編集責任者　米屋・密島
発行責任者　松本正雄
印刷　板橋謄写堂
電話(五〇一)一〇一六